

燉煌本瑞應圖卷

松 本 榮 一

帝王の徳至れば、天がそれに應じて麟鳳龜龍などの祥瑞を降す。

その様々な祥瑞（瑞應・應瑞）^{註一}を圖示したものを、古く瑞應圖或は祥

瑞圖、符瑞圖などと稱した。瑞應が現れると、その種類（大瑞・上瑞・中瑞・下瑞）^{註二}

によつては直ちにも表奏せねばならぬ。但し虚飾は許されぬ。詐つ

て瑞應をなす者は罰せられる。正しく瑞應に合するか否かを慥めた

り、瑞應の種目を決めたりするのには、圖書（圖書）^{註三}に依らねばな

らぬ。瑞應圖はそのやうな實用向きの目的の爲にも必要であつた。

今爰に、圖卷形式の唐代瑞應圖の遺例として、巴里國立圖書館所

藏ペリオ氏燉煌文書中の一巻を紹介する。

瑞應傳説は漢土の國初時代にも溯り得る性質のものであるだけにそれが彼地に於て圖畫されることは極めて古い時代からの事であつたに相違ない。特に龍とか慶雲とかの類は、その歴史が古いことであらうが、明かに瑞應圖としての纏まつた内容を備へた圖柄の遺品として、先づ漢代のものに著目したい。漢代は讖緯説の盛行期であ

り、かの王莽が巧みに天瑞符命を利用して、帝位を篡奪したことは周知の話である。

漢代の遺品としては、孝堂山石室及び武氏祠の畫象石に幾組かが

認められる。挿圖一は孝堂山石室畫象石に見る鳥獸圖であり、升鼎

故事の圖の傍に、三首鳥・双首鳥・双頭獸などが見える。これ等

は、山海經に出て来るやうな、怪獸奇禽の類を圖したものとも見ら

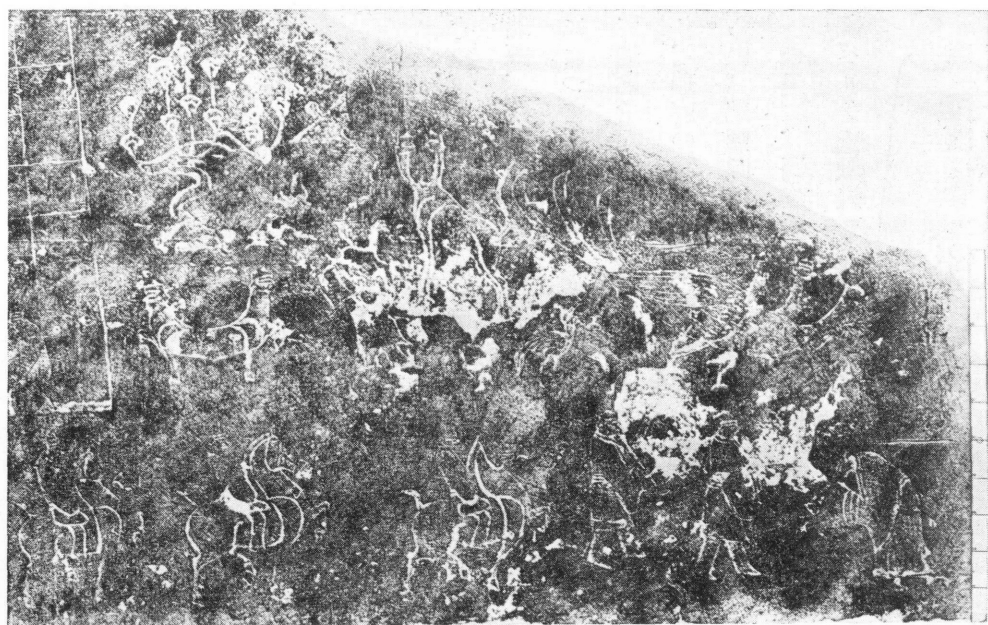
れるが、又、所謂比翼鳥・同心鳥・比肩獸といふが如き瑞應の圖と

も考へられるので、一應注目して置きたい。

挿圖二は武氏祠畫象石中の一つで、諸瑞應の形を並べて刻し、傍に瑞名と簡単な説明文を加へたものであるが、石面の損傷が甚しく辛うじて上段の白喙鳥と、第二段の比目魚などの存在を、傍記によつて察知し得る程度に止まる。當初は相當數の瑞應が羅列して刻み出されてゐたに相違ない。この外、傍記文字を存するもので、古來知られてゐる畫象石が他に二石あるが、共に損壞の爲め題記不明の個所が多い。然し幸にも「石索」に收載された文字により、その大

様を判断する事が出来る。その一石（關野博士「漢代墳墓の表飾」五七圖、大村氏「彫塑篇」一七二圖等参照）

には、玉馬・玉英・赤熊・木連理・璧琉璃・玄圭・比翼鳥・比肩獸・白魚・比目魚・銀甕・白馬・澤馬・玉勝などが刻まれ、他の一石



挿圖 1. 孝堂山石室畫象石 奇獸珍禽圖（關野；漢代墳墓の表飾，第21圖）

（關野、五六圖）
（大村、一七一圖）
には、狼井・

神鼎・麟・黃
龍・蓂莢・六
足獸・白虎な
どが刻まれて



挿圖 2. 武氏祠畫象石瑞應圖（東京大學所藏拓本）

ゐたものの如くである。

又、題字は無いが、圖様が極めて明瞭に遺存してゐる一石が、同じ武氏祠畫象石中にある。挿圖三に示すのがそれであり、上段に見る四種、下段に見る一種は、十五葉の蓂莢以下、何れも植物性の祥瑞註五を圖示したものだと思はれる。前記の二石と共に、このやうに段を劃して、多數の祥瑞を羅列するのは、瑞應圖の古い形式の一つを示すものであらう。（孫氏瑞應圖に、瑠璃屏風に祥瑞百二十例を鏤刻したものである事が記されてゐるが、これ等の漢代畫象石の瑞應の配列法の如きは、そのまま屏風に移すことが可能である。）

挿圖四は、後漢

建寧四年（171）に

陝西省成縣魚竅峽

に造られた李翁碑註六

に見る五種の瑞應

である。各圖に夫

々「黃龍」「白鹿」

「甘露降・承露人」

「嘉禾」「木連理」

の文字があり、更

に左に「君昔在甌

池、脩崢嶸之道、

德治精通、致黃龍

は、更に詳しい記事と、建寧四年六月十五日の日附がある。
この五瑞圖は、前記武氏祠畫象石のものに比べ遙かに繪畫らしい



挿圖 3. 武氏祠畫象石 瑞應圖 (東京大學所藏拓本)

白鹿之瑞、故
圖畫其像」と
記し李氏の善
行德政に對す
る瑞應の出現
と、それに因
む圖畫作製の
次第を説明し
てゐる。なほ
この五瑞圖の
傍の碑文に^{註七}



挿圖 4. 李翁碑瑞應圖 (建寧四年)
(Chavannes: Mission Arch. dans
la Chine Sept., I, pl. LXXXIX.)

もので、形態
も良く描寫も
緻密で、漢代
の圖畫として
甚だ優秀な作
と言ひ得る。
このやうなし
つかりした圖
を見ると、劉

宋の宗炳が造畫したといふ瑞應圖(張彦遠、法書要錄、卷二)が偲ばれる。宗炳の瑞應圖は千古卓絶と評せられ、後年、王元長の増補があつたが、有虞舜獬廌、周穆駿猊、漢武神鳳衛君舞鶴、五城九井、螺杯、魚硯、金膝、玉英、元圭、朱草、等凡そ二百十一物が收載されてゐたといふ。^{註八}
「南齊書」祥瑞志の序言に、蘇侃撰の「聖皇瑞應記」と共に、永明(南齊武帝時)中、庾溫撰の「瑞應圖」なるものの存在を示し、更に本文中の諸所に於て、「庾溫云」「謹案瑞應圖……」「瑞應圖云……」などと、その瑞應圖中の文辭を引用してゐる。これによると、齊時代には、既に圖入りの瑞應記が撰述せられてゐた事實を知り得る。即ち瑞應圖卷といふが如きものが、そろそろ此の邊りから、發足しはじめたと見られるのである。

降つて梁陳時代になると、孫柔之の瑞應圖とか、顧野王之符瑞圖など呼稱される瑞應關係の圖卷が、幾組か造り出されたものの如く

「隋書」の經籍志には、

瑞應圖二卷 梁有孫柔之瑞應圖記
 瑞圖讚二卷 孫氏瑞應圖贊各三卷亡
 祥瑞圖十一卷
 祥瑞圖八卷 侯宣撰
 芝英圖一卷
 祥異圖十一卷
 白澤圖一卷

又「舊唐書」の經籍志の中には、

瑞應圖記二卷 孫柔之撰
 瑞應圖讚三卷 熊理撰
 祥瑞圖十卷
 符瑞圖十卷 顧野王撰
 白澤圖一卷

などが見える。(新唐書藝文志にも、大體同様の書目が收載されてゐる。)

ところで、張彥遠は『歷代名畫記』の「述古之秘畫珍圖」の條で

祥瑞圖十卷 起天有黃道、失撰者。
 符瑞圖十卷 行日月、揚延光并集孫氏熊氏圖。
 白澤圖一卷 三百二十事、出抱朴子、黃帝巡東海而遇之。

と記し、孫柔之及び熊理の瑞應圖に觸れてゐるが、それ等に先んじて特に「古瑞應圖二」と記してゐる所を以てすると、孫氏や熊氏よりも更に古い時代の瑞應圖二卷の存在が、當時知られてゐたものと見える。^{註九}

(前記、隋書經籍志に見る瑞應圖二卷といふのも、恐らくこの古圖に當る二卷であらう。そして、これ等が、前記南齊書祥瑞志に云ふ「庾溫撰瑞應圖」を指すものとすれば、かの圖卷が二卷本であつた事が想像される。)一體、識緯に關する書籍は、劉宋でも梁でも隋でも、その弊を憂へた爲め、^{註十}幾度か焚棄の厄に遇つてゐるので、唐代に果してどの程度のものが遺存してゐたのか疑問である。更に元・明の時代にも屢々禁令が出

されてゐる有様であるから、今日辛うじて斷片的にも知り得る孫氏瑞應圖(玉函山房輯佚書、觀)顧野王符瑞圖(說)などは、洵に珍とすべきものに相違ない。然し惜むらくは、これ等には圖畫の部分が缺失してゐるのである。

さて、爰に取上げんとする燉煌本瑞應圖卷は、巴里國立圖書館(Bibliothèque Nationale, Paris)所藏の、ペリオ(Paul Pelliot)氏燉煌文書中のもの(No. 2683)で、料紙の高約二十七糎、全長四米半に及ぶ。首尾兩端を缺失してゐるが、殘存部には切斷がない。全幅上下二段に分ち、上段に圖畫、下段に文字を配すること、かの繪因果經と同じである。但し、上段の天地は下段よりも狭く、下段には罫を施す。總體四十二段あり、そのうち、圖を具有するもの二十三、缺くもの十九。圖には夫々傍に題名が記されてゐる。圖の彩色は概して單純であるが、赤・黃・綠の外に胡粉を效果的に點じ、甚だ潑刺たる趣を出してゐる。書畫共に中唐から晩唐に掛けての作製である事を想はせる。

この瑞應圖卷は、圖畫の缺けた段が多いばかりでなく重複もあり(32神龍、40□□の兩段に「重」の字を記入)、誤字脱字も少くない點から見て、寫しである事に論はないが、寫しとすればその原圖が孫氏系なりや熊氏系なりや、瑞應圖として如何なる素性のものであらうか。卷中敘述の文詞は、その大半が古典の瑞應記事の拔萃であり、特に大戴禮は三ヶ所(8・9・10)に、孝經援神契は二ヶ所(14・21)に、

尙書中候も二ヶ所(17・22)に引用されてゐる。その他、山海經、淮南子、文子、宋書瑞(宋書符瑞志)など、二十種に及ぶ書名が認められるが、就中「孫氏瑞應圖」と明示した文が二ヶ所(15・20)に在るのみならず、前記の孫氏瑞應圖と對比して、全く共通した内容を具有する段が、圖卷々頭に羅列(1・2・3・4)してゐる點は、特に注目すべきであらう。試みに孫氏瑞應圖の「靈龜」の條を掲げると、

靈龜者神異之介蟲也、元文五色神靈之精也、上隆法天下方象地能見存亡、⁽¹⁾明在吉凶、不偏不黨、唯義是從、其唯龜乎、尚書龜從此謂也、靈者德之精也、龜者久也、能明於久遠事、王者不偏不黨、尊事耆老、不失舊故、則神龜出。⁽⁴⁾靈龜似鼈而長合五行之精、⁽²⁾三百歲遊於藕葉之上、千歲遊於蒲上、三千歲尚在著叢之下、徑一尺二寸、王者奉順后土承天則見。一日德澤湛漬漁獵從則出、禹卑宮室則出、文王時亦出。

この文中、(1)は圖卷中の第1段に、(2)は第2段中に、(3)(4)は夫々第3・第4段中に同文が織込まれてゐることが判る。

更に又、同書の「鳳皇」の條も、内容は極めてありふれたものであるが、圖卷38發鳴の段以下、39・40各段と共通する詞の多い點を一應指摘して置く。

鳳皇仁鳥也、雄曰鳳雌曰皇、王者不刳胎剖卵則至、大鳥似鳳而爲孳者非一鳳王者之嘉祉、負信戴仁挾義膺文苞智、不啄生蟲、不折生草、不羣居、不侶行、不經羅網、上通天維、下集河洛、明治亂、見存亡也。

かかる點からすれば、少くも局部的には、この圖卷が孫氏圖と極めて親近な間柄にあるものである事が推察される。なほ、27神龍、28河圖、29河書、の各段に「舊圖不載」と記してゐる點にも、この

圖卷の成立年代が暗示されてゐる。即ち爰に云ふ「舊圖」とは、前述の如く、張彥遠が孫氏圖熊氏圖よりも先んじて擧げる所の、所謂「古瑞應圖」、南齊書祥瑞志に云ふ庾溫の瑞應圖、と同一のもの、又は同類の古圖を指してゐるのに相違なく、そのやうな古圖に收載されぬ祥瑞が、この圖卷中に收録されてゐる旨を、特にことわつてゐる譯である。

然し、假令この圖卷の内容が、孫氏瑞應圖に近いものとするも、現状からその首尾完全せる形態を想像する時は、この方が孫氏圖以上に厖大であつたとせねばならぬ。如何となれば、かの孫氏圖には「日月揚光」「日有黃抱」に始まり、景雲、甘露、醴泉の類から、靈木、靈鳥、靈獸、靈龜を経て比目魚、大蜃に至るまで、總計一百二十一種を數へるのであるが、この燉煌本は、龜、龍、鳳の纔か三種目の祥瑞を説くのに、已に四十以上の項を立ててゐる所からすればその完璧なものは孫氏圖卷を遙かに凌ぐ量であつた事は明白であり現存程度の長さを以て一卷を形成してゐたものとせば、恐らく三卷或は五卷の量は少くも必要であつたと想像される。

文詞の部分に就ては、概略以上のやうな事が考へられるのであるが、上段に見る圖畫の部分も、大體隋以前の古い態が、正しい筆格で傳へられてゐる。然しこの方はかなり時代色に支配されてゐるのを見逃す事が出来ぬ。池水涯岸の描寫や、飛雲の趣などにそれが著しく、龍鳳の様子にも、もはや六朝風の勁烈な動きが認められぬ。

形姿そのものには戰國時代の遺品にも比すべき古態^{註十一}が窺はれるにも

拘らず、畫趣に生動の氣を缺いてゐるのは、孫氏熊氏時代の瑞應圖を偲ばんには、稍や不滿の感なきを得ない。これは製作年代から言つて已むを得ぬことであらうか。なほ、第9帝顯祖乘龍の段以下、十數段に亘り、人物を扱つた部分が悉く缺けてゐるのが惜しまれる。如何なる理由によるのか、圖が複雑である爲の省略ではなく、恐らく原本が既にこれを缺いてゐたのであらう。

盛唐、吳道子時代の佛畫の名手、楊廷光が作つた符瑞圖といふものを、張彦遠が名畫記に記してゐるが（前記、符瑞圖十卷、それはいか
中に含まれてゐる）がなものであつたのか。楊の畫は吳生に似てゐるが筆致が更に細かい、と彦遠は敍べてゐる。^{註十二} 瑞應圖の如き保守的傾向の強い古典畫を描くのは、奔放磊落な吳の筆よりも、寧ろ恪謹な楊の筆が適してゐた事であらう。又、唐代では陳閔（宏）が祥瑞圖を描いてゐる。

名畫記卷九（藝文志）に言ふ「上黨十九瑞圖」といふのがそれである。

陳閔は韓幹と並んで鞍馬の名手であり、彦遠は特に家畜の圖畫が甚だ多い、と言つてゐる。^{註十三} 鞍馬家畜の巧みな陳ならば、龍鳳靈龜を描く

にも相應しい畫人であつたに相違ない。但し、十九瑞といふからには、種目的に詳細な内容を具へた瑞應圖とは思はれぬ。ともあれ、ここに見る燉煌本圖卷は、一方に於て六朝時代瑞應圖卷の概要を偲ばしめると同時に、唐代楊陳等の新しい畫人達の作品推定にも、見當を與へて呉れる點で、意義深いものがあると思ふ。なほ此のやうな、佛敎とは全く無關係な圖卷が、燉煌石室に保存されてゐたと云

ふ事は、該石室が、往古西陲に於ける大ライブラー的性格のものであつた事實を語るものとして、興ありと言はねばならぬ。

註一、「論衡」講義篇、「夫瑞應。猶災變也。瑞以應善、災以應惡、善惡雖反、其應一也」

二、仁井田博士「唐令拾遺」四八三頁—四八九頁參照。

三、祥瑞は總て圖書（又は圖畫）に依つて、その虚に非ざるを徒め、又それにより、大瑞に合するものか、上瑞に適ふものか等を決定すべく定められてゐた。唐令に關するもの、同上書、四八三頁以下に詳しい。

四、關野博士「漢代墳墓の表飾」第三一、五六、五七、七〇圖。大村西崖氏「彫塑篇」一七一—一七三圖。等。

なほ、佛典中にも瑞應の譯語が用ひられて居り、（五瑞應—增一阿含卷二六、大正藏、二、六九三C）、佛敎美術遺品中にも祥瑞圖が認められるが、爰に直接の關係が無いので略す。

五、孫氏瑞應圖には、この種の祥瑞として「萐莆（倚扇・實閭・倚蓬）、萐莆、屈軼、芝草、芝英、朱草、拒鬯、福草、福并、威綏、延嘉」等を擧げて解説してゐる。

六、碑文に「漢武都太守、漢陽河陽李君、諱翕、字伯都……」とある。

七、E. Chavannes: Mission Archéol. dans la Chine Septentrionale, I, p. XC.

八、唐、張彦遠「法書要錄」卷二「梁、庚元威論書」の條參照。

九、魏明帝の青龍元年（33）正月、青龍の現れたのを、帝が畫工に詔して圖寫せしめんとした事が宋書符瑞志に見える。然しその時は龍が姿を潜めた爲め、不成功に終つたらしい。

十、「隋書」經籍志は、讖緯書を擧げた後に、歷朝の讖緯書焚棄に關し、次の如く記してゐる。「……至宋大明中、始禁圖讖、梁天監已後、又重其制、及高祖受禪、禁之踰切、帝煬即位、乃發使四出、搜天下書籍、與讖緯相涉者、皆焚之、爲吏所糾者至死、自是無復其學、祇府之内亦多散亡」

十一、「楚文物展覽圖錄」（北京歷史博物館出版）五三圖其他參照。

十二、名畫記卷九「楊庭光……頗有似吳生處、但下筆稍細耳」

十三、同上「陳閔、爲永王府長史、善畫寫貌、工鞍馬、與韓同時、家畜圖書絶多、……上黨十九瑞圖」

1 (缺)

(靈龜力)

() 者其唯龜乎

*書曰龜從此之謂也靈者德之精

也龜者久也能明於久遠事

也王者不偏不黨尊者不失故

舊則神龜出矣

*孫氏瑞應圖「尚書」

2

□ 龜

(靈力)

靈龜者黑神之精也王者德澤

湛積漁獵^{*}時則靈龜出矣五

色已章則金王倍陰向陽上逢

象地槃行象山四出轉運生三

百歲遊於耦葉之上千歲化浦(蒲)

上逢一尺二寸能見存亡明於吉凶

不偏不黨唯義之從

*符瑞志「德澤湛清漁獵山川從時則出……」

3

□ 龜

雒書者天地之符水之精也所

者地天經川也王者奉順后土

承天則何歲遊於耦葉之上千

歲化浦上一尺二寸能見存亡吉

凶

4

靈龜

似鱉而長合五行之精卜知吉凶

出蔡地

5 (玄)武

似龜而黑色常負蛇而行北方
神獸

6 玉龜

玉龜者師曠時出河東之雀爲
聖國^{*}出之河錄識書

^{*}孫氏「涯爲聖圖出河負錄識書」

7 龍

8 黃帝乘龍

禮記曰聖王用水火金木必時
□爵位必當年德無水旱之災
妖孽之疾則龍在官治瑞應圖
應圖曰君子在位則神龍出
大戴禮曰黃帝治五氣設五量
撫萬民四方乘龍而遊

9 帝顓頊乘龍

大戴禮曰顓頊端淵以有謀疏
通以知事養財以任地履時以象
天依鬼神以制義治氣以教民
潔誠以祭祀乘龍而至四海動
靜之物大小之神日月所照莫
不砥厲

10 帝嚳乘龍

大戴禮曰帝嚳曆日月而送
迎之明鬼神而敬事之春夏
乘龍秋冬乘馬

11 帝禹御二龍

括地圖曰禹平天下二龍降之禹
御龍行域既周而還

神靈記云禹乘
二龍哀爲御

12 五龍舞河

魏文帝雜事曰黃帝錄圖五
龍舞河此應聖賢之符也

13 交龍洮於河

禮斗威儀曰君乘木而王其政升
平則交龍洮於河

注云龍交合遊戲自
西洮於河言升平之治

14 天龍負圖

孝經援神契曰天子孝則天龍負圖也

15 青龍

孫氏瑞應圖曰青龍水之精也
乘雲雨而下上不處淵泉王者
有仁則出又曰君子在位不肖
斥退則見

*孫氏「乘龍而上下不處……」

16 青龍進駕

淮南子曰黃帝時日月精明
風雨順時五穀登熟故青龍
進駕

17 青龍銜圖
授周公

尚書中候曰周公攝命七年
歸政成王沈璧於河榮光幕
河青雲浮至青龍銜玄甲臨

壇吐圖而去

注云周公攝政歸美成王制禮作樂天下洽和榮光五色

從河水出幕覆其上淨雲從榮光中來龍者蒼帝威仰之使玄甲所以畏圖

18 赤龍在澤谷

禮稽命徵曰王者得禮之
制則澤谷之中有赤龍

19 赤龍負圖
授帝堯

春秋元命苞^(包)曰堯遊河渚赤龍負圖以出圖赤色如綈狀赤玉爲匣白玉爲檢黃珠爲泥玄玉爲繩章曰天皇大帝合神制署上曰天帝孫伊堯龍涓圖

在堯與大尉等百廿臣發視之

藏之大麓瑞應圖云圖有江河海
水山川丘澤之形及洲國

之分天子聖人所興
起容顏形狀也宋書瑞曰赤龍河

圖者地之符也王者德至淵泉則河^{*}

*宋書符瑞志、河ノ下「出龍圖」ノ三字アリ

20 龍負圖

孫氏瑞應圖曰河圖者天地之命紀水之精也王者奉順后土德及淵泉則出又曰王者承天命而行天道四通而悉達無益之術藏而世無浮言之書則河出龍圖

21 黃龍

孝經援神契曰德至淵泉則

黃龍應 宋均注云黃龍應則準繩正

22 黃龍負圖授黃帝

龍魚河圖曰黃龍負圖鱗甲成字以授黃帝々令侍臣寫之以示天下

尙書中候云河龍圖出赤文象字以授軒

23 黃龍負圖授舜

春秋運斗樞曰舜爲天子東巡至乎中月臨觀 注云臨河觀望也月或爲丹至米負圖出置舜前圖黃玉

爲匣如匱長三尺廣八寸厚一寸四合而連有戶白玉爲檢黃金爲繩黃芝爲泥封兩端章曰天黃帝符璽五字廣袤各三

寸深四分鳥文舜與三公大司空禹等卅人發圖玄色而綈狀可卷舒長卅二尺廣九尺中有七十二帝地形之制天文分度之差

注云黃龍含樞紐之使也故龍匣皆黃四合者有道相入也有戶言可開闔也尙書中

候云舜沈璧黃龍負卷舒圖
出水壇畔赤文錄字

春秋運斗樞曰旋星得則黃

龍見蔡伯喈月令章句曰智

聽政事則黃龍見

24 玄龍銜雲

龍銜雲

春秋孔演圖曰文命將興玄

25 蛟龍

文子曰王有道德者天與之地
助之鬼神輔之則蛟龍宿其沼

山海經云蛟似龍蛇而四脚小頭
細頸々有白嬰大者十數圍

26 黃龍

四龍之長也不灑池而漁至淵

泉則黃龍遊於池能高能下

能細能精能幽能冥能短能

長乍存乍亡

27 神龍

舊圖不載君子在位則神龍
出矣

【28 河圖

舊圖不載神龍負圖水紀之
精王者德至淵泉則出矣堯在
河渚之上神龍赤色負圖如出

29 河書

舊圖不載王者奉刑法則河
出書周公時神龍解甲入於厖
展

30 河圖

天地之命紀水之精也王命后
土后土承天則河出圖矣堯坐河
渚之上神龍負圖而出江河海

31 河圖

水山川丘澤之形兆及王者州國之分天子聖人所興起容頰形狀也王者奉子命而行天道四通而悉無益之術藏而無浮言之書則河圖出

*孫氏「王者承天道四通而悉達無益之術藏而世無浮言言吉則河出龍圖」

天地之符水之精也河者地大經川也王者奉順后土承天則河雒出圖書矣昔者黃帝坐玄扈雒上鳳皇銜書至堯坐中河龍負圖而出聖人沈河雒而遊者有侯望也圖河海山川國之分聖人物起容猊尔

32 神龍

(重)君子在位則神龍出

33 青龍

青龍者水之精也乘雲雨而上下處淵泉之中有仁主則見一本君子在位不肖斥退則見

【34】黃虬

黃虬一名龍無角曰虬一則虬龍子也黃虬與人君之零瑞背上負玉函有玉々牒々之錄々者人君合符契則有之應也黃者中之色言人君有中和之德愬六合以居中也黃虬出象人君之大變化玉函者象君有玉德函盛背負者象君有明天下負戴玉牒者象君有明白文章牒者(脫力)象人君累明文之德洛出書者欲使君德臨洛潤澤恩平天下如水無窮也如水之均平天下酌取也

35 黑龍

禹得黑龍之瑞治水太平宋孝武時黑龍見武帝曰吾不堪也此及禹之應也何德當吾遂脩德大治昭□□傳云龍□于降郊葵默曰龍水物也水官脩則龍見水官棄則不見也

36 白龍

王者精賢有德則白龍見

37 黃龍^(?)


五龍之長也不漉池而漁德至淵
泉則黃龍遊於池爲龍能高能
下能長能短紛紜文章神靈之精
也

38 發鳴^{*}

狀似鳳皇鳥啄大鵝羽翼大足脰
身仁戴智嬰義應信負禮至則
丘之威

*符瑞志「鳳凰」ノ條「晨鳴曰發明、晝鳴曰上朔、
夕鳴曰歸昌、昏鳴曰固常、夜鳴曰保長……」

39 

狀似鳳皇銳喙小頭大身細足脰
翼若葉身短戴義嬰信膺仁

負禮至則早之感也

40



(重)

狀似鳳皇鳩啄尊刑身義信嬰
禮應仁負智至則之感也計圖
微

41



狀似皇鳳啄杯翼負尾身禮戴
信嬰仁膺智

42



(缺)